

学びのデザインシート（授業前）

主体的・対話的で深い学びを実現する授業構想【地理歴史／日本史A】

1. 対象（定時制の課程 4年生 5人）

中学校時代不登校者2人、全日制・分校からの転入生各1人、過年度生1人と様々な事情を持つ生徒が在籍し、知識や意欲に差はあるが、全体的に素直で前向きに授業に取り組めるクラスである。しかし、主体的・協働的な学びや発表には抵抗があり、他人の意見や板書を写すだけで終わってしまう生徒が多い。

1学期～2学期中間試験には、1920年代までの歴史を風刺画や平易な資料等を全員で読み取る中で学んだ。生徒は少しずつ情報の読み取りに慣れてきたが、生徒がより主体的に情報を読み取り、自分の言葉で記述できるようにする必要がある。

2. 単元名 「15年戦争と日本・アジア」（全10時間）

3. 単元目標

「なぜ日本は戦争の道を選んだのか」という問いに、主体的に複数の資料から情報を読み取り、多面的・多角的に考察し表現する。

4. 本時の目標

- (1) 15年戦争とその時代背景に関心を高め、意欲的に追究する（関心・意欲・態度）
- (2) 15年戦争とその時代背景を理解する（知識・理解）
- (3) 複数の資料から情報を読み取り、有用な情報を論述に活用することができる。（資料活用の技能）
- (4) 開戦に至る原因や背景を複数の情報をもとに多面的・多角的に考察し、自分の言葉で表現することができる。（思考・判断・表現）

5. 授業展開

解決したい課題や問い

なぜ日本は戦争を選んだのか。（論述課題）

考えるための材料

(第1次) 政党政治に関する資料	(第2次) 1920～30年代の経済に関する資料	(第3次) 協調外交に関する資料	(第4次) 対中外交に関する資料	(第5次) 日米諒解案とアメリカに関する資料
想定される活動	想定される活動	想定される活動	想定される活動	想定される活動
「なぜ憲政の常道（政党政治）は続かなかったのか」について考察する。政党政治は慢性的不況の抜本的な解決策を打ち出せず、財閥の癒着や汚職事件の多発によって国民の信用を失ったこと。大日本帝国憲法下では帝国議会に内閣総理大臣の指名権はなく制度的に保障されていたわけではないことなどに気付く。	「なぜ国民は軍部を支持したのか」について経済面から考察する。井上財政の金本位制の自動調節機能を期待した経済政策が世界恐慌によって失敗して昭和恐慌を招き、国民の失望と困窮を招いたこと。満州事変後の高橋財政によって経済が回復したため、経済政策への評価が正当になされず、国民の戦争や軍部に対する期待が高まったことなどに気付く。	「なぜ協調外交は続かなかったのか」について考察する。第一次世界大戦後の協調外交は、国内の不況のため軍縮による軍事費の抑制、重要な貿易相手・外債購入国のアメリカとの円満な関係の維持、満州の確保が目的であること。中国の権益維持のため、抗日運動や蔣介石の北伐が発生すると協調外交を維持できなくなったことなどに気付く。	「なぜ中国との戦争を止められなかったのか」について考察する。国民やマスメディアが戦争を支持したこと。軍部を政府が抑えられず強い発言力を持ったこと。第二次近衛声明など対中外交で失敗を犯し、終戦のタイミングを失ったこと。イギリス・アメリカ・フランス・ソ連が中国（蔣介石）を支援し、日本に徹底抗戦させたことなどに気付く。	「なぜアメリカとの戦争を止められなかったのか」について考察する。国民が戦争を支持したこと。対日経済制裁によって日本の資源確保は困難になり、戦争か否かを短期間のうちに決めなければならなかったこと。日米交渉が妥結できなかったこと。両国に自民族の優秀さの過信と相手国を蔑む認識があったことなどに気付く。

対話と思考（対話を通じた協働的な問題解決のプロセス）

学習の流れ

第1～5次 **講義**（全員：資料の読み取り）→**論述**（個人）

クラスを1つのグループとし、自由に発言し意見を共有できる状態を保ちながら講義と資料の読み取りを行い、授業の最後に問いに対する答えを個人で論述する。

第6次（本時） **説明**（5分）→**グループワーク①**（10分）→**グループワーク②**（10分）→**論述**（15分）→**まとめ**

2つの少人数グループに分け、戦争を選んだ理由を国内（第1・2次）と対外（第3～5次）の視点からそれぞれまとめる。次にメンバーを入れ替えて、それぞれの班で考えた理由を伝え合った後、個人で論述を行う。論述後は席を立てて他の生徒の論述を見て回る。

学習の成果（予想される生徒のあらわれ）

- ・資料について探究することで、なぜ協調外交や政党政治が機能せず、軍国主義を国民が支持したのか等の時代背景を理解し、戦争が国内外の複数の要因が重なって起こるものであることを自分の言葉で表現できる。
- ・グループ学習において、前時までの学習や他人の説明や意見、各種資料を参考にして、主体的・協働的に学習課題に取り組むことができる。

予想される生徒のあらわれに関する育成すべき資質・能力三つの柱からの分析

①知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・憲政の常道と政党政治下での経済政策、協調外交から積極（強硬）外交への転換、満州事変や日中戦争、太平洋戦争の開戦などについて、資料の読み取りを主とした活動を通して時代背景を理解することができる。
②思考力・判断力・表現力	<ul style="list-style-type: none">・第1～5次で複数の資料から読み取れたことをもとにグループ課題に取り組む、その過程や結果をまとめて他グループのメンバーに伝えることができる。・学習課題について多面的・多角的な視点から自分の意見を適切に表現することができる。
③主体性・学びに向かう力 協働性など	<ul style="list-style-type: none">・戦争が国内外の複数の要因が重なって起こるものであることに気付く。・グループ活動において、主体的・協働的にグループの課題に取り組むことができる。

授業実践振り返りシート（授業前後）

解決したい課題や問い 「なぜ日本は戦争を選んだのか」

授業開始直後と授業終了時の学習課題に対する考え（あらわれ）を比較・分析することで、生徒の学習状況を把握し、授業設計診断4項目の視点に立って授業設計を見直す。

	授業開始直後の学習課題に対する考え	授業終了時の学習課題に対する考え
Aさん	市場拡大のため。	立憲政友会と立憲民政党の二大政党政治になったけど、政党内で汚職が多くて政党に対して不信感があったから二大政党政治を国民が支持しなくて、恐慌が続いた時に満州事変が起きて国内の輸出が増えて景気が良くなったから、国民は戦争をすると景気が良くなると思って軍部を支持した。また、日本にとっての資源供給地として満州は重要で協調外交を続けようとしたけど植民地や満州を手放せなかったため失敗した。政府が外交に失敗したのも国民が軍部を支持した理由にあった。軍隊の力が大きくなるにつれて政府は軍を止められなくなり日中戦争が長引くこととなった。中国を支持していたアメリカからの経済制裁を受けていた日本だったが、日米諒解案に納得がいかず、戦争をし、経済制裁を打破しようとした。
Bさん	日本の景気をよくするために、戦争を始めた。	政党内で汚職が多くて、政党に対して不信感があったから、二大政党政治を国民が支持しなくて、恐慌が続いた時に満州事変が起きて日本で輸出が増えて景気が良くなったから、国民は戦争をすると景気が良くなると思って軍部を支持して戦争を選んだ。満州が日本にとって大切な場所で、中国の情勢が変わったり、政府が外交に失敗したりして政府が軍隊を抑えることができなくなった。経済制裁をアメリカからされていた日本はアメリカとの戦争を避けるために日米諒解案を提示したがアメリカから断られた。ハル・ノートには日本が望むものがなかったから戦争を選んだ。
Cさん	他国から攻撃を受け防衛のため。	政府内で汚職があり不信感を持ち国民が支持しなくなった。満州事変後景気が上昇したので国民は戦争を後押しした。資源が日本になく満州に頼ったが協調外交に失敗した。日本が張作霖爆殺事件を起こしたが失敗して戦争開始。経済制裁をアメリカからされていた日本はアメリカとの戦争を避けるために日米諒解案を提示したが、アメリカに却下されてアメリカから出た案には日本が望むものがなかったため、戦争を選んだ。

授業設計の振り返り	
解決したい課題や問い	<ul style="list-style-type: none"> 「なぜ日本は戦争を選んだのか」はテーマが大きすぎたかもしれないが、多面的多角的な視点から戦争を捉えることはできた。
考えるための材料	<ul style="list-style-type: none"> 今回は教師が資料や情報をプリントやパワーポイントで提示し、それをもとに考察と論述を行ったが、もっと教科書を活用して生徒が主体的に資料や情報を収集する活動を取り入れる活動にすべきだった。 読み取りが難しい史資料もあり困惑する生徒もいたが、生徒の対話（発言）が活発化して理解が深まった一面もあった。
対話と思考	<ul style="list-style-type: none"> 授業計画が生徒の実情に合っておらず、時間内に収まらないことで生徒の対話や思考に停滞を生み出してしまった。焦点化や簡略化などの改善が必要だと感じた。 資料や情報を教師が恣意的に選択したことで思考の幅が制限されてしまい、深い学びには至らなかった。
学習の成果	<ul style="list-style-type: none"> 論述が得意でなく問いに対して一面的な視点から答えていた生徒が、まとめとして行った論述では多面的多角的な視点から問いに答えられるようになった。 資料の読み取りやグループワークに苦手意識を持ちながらも主体的に取り組むことができた。